

世界をみつめて1

エジプトにみる革命の論理

堀川 徹



中東イスラーム世界が激動している。2月11日夜、30年間在職したエジプトのムバラク大統領がついに辞職した。ムバラク退陣を要求する群衆が、カイロの中心部タハリール広場を埋め尽くし、18日間で大統領を辞任に追い込んだ。チュニジアのベンアリ大統領が国外へ逃亡したのをきっかけに、民衆の怒りがドミノのようにアラブ諸国に押し寄せている。追いつめられ居直ったカダフィー。リビアの次はどこか？長期間政権の座にある支配者たちは、戦々恐々としているに違いない。

エジプトの人々がこぞってムバラク退陣の声をあげたのは、長年にわたって続けられた強権政治による弾圧と、経済の停滞による高い失業率が、彼らに苦しい生活を強いているからだ。それにしても、中東地域には独裁的な政権がなんと多いことか。しかし、人々が決して独裁政治を望んでいないことは、チュニジアからエジプトそしてリビアへと続く一連の動きの中で、彼らが示した行動を見れば明らかであろう。

今回の革命が、一向に改善しない生活に不満を持つ若者たちによって、インターネットを媒体に引き起こされた新タイプの民衆運動である、との見解は大方の一致するところだ。しかし、エジプト革命が、イスラームのイデオロギーに基づいてなされた1979年のイラン・イスラーム革命とは異なる、という毎日新聞の2月13日付社説は事の本質を見誤っている。

タハリール広場に集まった群衆が、一斉に礼拝を行う様子をテレビで見た人も多いだろう。そう、彼らはイスラーム教徒なのである。決められた時刻になれば、信徒の義務である礼拝をきちんと行う敬虔なイスラーム教徒なのだ。彼らが意識していたか否かは別として、実は今回の革命も、イスラームが内包する革命の論理に基づいて行われたのであり、その点ではイラン革命と本質的に同じなのである。

イスラームでは、神の前において人間は平等だと説いている。大統領であろうが一介の庶民

であろうが人として同じ、つまり同等の発言権を持つということだ。しかし、共産主義のように経済的な平等の実現を目指すものではない。貧富の差を認めつつも、余裕のある者は社会的弱者を援助することが求められており、施政者には、その権限と引き替えに、公正な社会の実現に向けて努力することが義務づけられている。そして民衆は、施政者が公正でないと考えた時には、その交代を要求することができる。私たちの方式とは異なるが、「民主的」なシステムを持っているのだ。ムバラク大統領が、あっけなく退陣したとの印象を持った人も少なからう。民衆に見限られた支配者に明日は無いのである。

イラン革命も今回のエジプト革命も、支配者の不正を追及して人々が大規模なデモを繰り広げた姿は同じである。異なっているのは、イラン革命ではカリスマ的な宗教指導者ホメイニーがいて、イスラーム法に基づく政体へと人々を導いたが、今回はそうしたリーダーが見当たらない点だ。イスラームと無関係に見えるかもしれないが、この革命もイスラームの論理に則って遂行されたのである。

21世紀の世界をみつめる時、地球上人口の4分の1を占めようかというイスラーム教徒の動向を無視することはできない。しかし、彼らの行動を理解しようとした時、われわれは自分たちの価値基準で判断してはいないだろうか。真の意味での異文化理解がここで求められるのだと思う。エジプト革命は明確な指導者のいない中、ほとんど血を流すことなく成し遂げられた。不正なムバラクを追い出すことはできた。では、次にどの様な政治を実現させるのか。エジプトはどんな道を歩むのか。明確な受け皿は用意されていない。国内外の様々な勢力の諸々の思惑が渦巻く状況下で、人々は真の平和を手に入れることができるのであろうか。

ほりかわ とおる（教授・西南アジア史）